

ホラーに挑める今時の子じゃない
猛者の為の体験版

著者・ろつきゆん

紫月界のプリンセス

まったく★無茶し★やがって、
だが、嫌いじゃない♡

体験版…紫月界のプリンセス

ろつきゅん

世界を染めるのは紅の陽光と、色濃く浮かぶ闇色の影だった。西の陽光が紅と闇のコントラストを浮き彫りにすれば、敷地を正四角形で囲む校舎は、歩く者にまるでラビリンスにいるような錯覚を与えてくる。紅闇に包まれた廊下。そこは異様な湿度に満たされた空間だ。いや、湿度どころか、天井の吸音ボードに雫が浮かぶと、やがてそれは粘液となり、床へと伸びて一筋の線を作った。

「——なんなの、なんであんなのがいるのよ!?!」

粘液を払いのけて進む女は感情を爆発させ、強い叫びを廊下に木霊させた。

「俺たちが分かる訳ないダロ!? 畜生、肩、肩を食わレタ!」

「早く、とにかく、今は走ろう!」

垂れる粘液は次々糸を引き、異様な粘りを廊下に見せる。周囲からポタリ、ポタリと音が廊下に響いていく。避けるように駆ける者達は三人。液を手で弾き、荒い息を吐くまま疾走する。

「あいつ、笑ってたヨナ。なんか、なんか異常だ。変だったゾ!」

身長二メートルを超える筋骨隆々の男二人組が体に不釣り合いな不安げな声を出す。その内の一人、イントネーションの変った男は肩から血を吹きだしている。

「あんたのイントネーションよりましよ!」

髪を右側で束ねて肩まで流す猫目がちの少女がヒステリックに叫びをあげた。

「アメリカ帰りだから仕方ないンダ! 発音バカにするのはヤメロ!」

「二人とも喧嘩してる場合じゃないぞ!」

金髪の大男が二人の仲裁に入る。それにしても男達は世界が異常だと思った。学校の廊下だ

というのに雫が垂れ、細い糸が残り、その雫は床に粘る水溜まりを作りだす。やがてそれは踏み固めるに足る量と化していく。夕焼け空も色を失い、世界は濃紺なビロードに包まれ校舎も闇へと染まっていた。窓ガラスの向こうでは巨大な半月が地平から静かに昇っていく。

「^{すめらぎ}皇さん、連中は何人いるんだ!? 何で死なない!」

「私が知る訳ないでしょ! 高智、あんた、手を抜いたんじゃないの!」

「抜いてない……だって。だってさっき——」

まるで現世から異界へ来た者を歓迎するように、

「さっき俺はあいつを——殺したンダ!」

ズル……ズルウ……と音がする。それは何かを引きずるような音。そして呻き声……血だらけの男、高智と槇葉は、少女皇と進む先を見つめている。窓ガラスから覗くのは紫闇の闇。進む先は見通しが悪く、紅明かりの消えた回廊に呻きの声だけが響いている。

「今度は俺がやる。二人とも下がってろ!」

「槇葉、私も何かで戦うわ、一緒にやるしかないよ!」

「お、俺も、マダできるカラ」

「高智はいいから、俺に任せて休んでろ!」

粘液に塗れる蛍光灯が廊下を頼りなげに照らしている。通路の先は漆黒に彩られ、足を一歩進めると、闇はその分だけ先の蛍光灯から薄明かりだけを招き入れる。

そんな折りだ。闇色に染まった回廊の中、布を引きずる音がする。

「ダメ、この消火器外れない。壁まで粘液で埋まっちゃってるよ!」

「良い、俺だけで、頑張るから! 後ろ、後ろみて——」

歩みを寄せる音。そして呻き声。それは既に行く先に、また今来た道からも響いてくる。

「き、来た……両方から来た!」

女が震える声を振り絞ると、それは静かに現れた。虚ろな眼差しを粘液の中で動かし、開かれた口腔は喘ぐように幾度も開閉を繰り返す。粘液に塗れた異様な女が現れたのだ。

「女……よね。なんで粘液に包まれてるの……」

震えた声を出す皇悠美は肌に垂れた天井からの粘液を慌てて振り払う。

槇葉は悠美に言葉を返さない。代わりに異形へと駆け出していた。

「手加減しないで！ 一氣にやっちゃって！」

叫ぶ悠美の声に後押しされ、槇葉は躊躇なく拳を粘液塗れの女に突き立てた。

風圧さえ作る豪腕は粘液ごと女の顔を叩き飛ばす。そして首が後方へガクンと垂れた。

『……いた……い……気持ち……いい……たす……け』

倒した首をぶら下げ、それがぐると肩を通過して胸元に揺れる。そして眼差しを柔和に細めて悠美をみた。「うえええええ」耐え切れず、悠美が嘔吐する。

だが槇葉は彼女の背を摩る事も、守る事もできやしない。目の前にいる粘液の女。その背後から、また同じような女が現れたのだ。

「なんで、なんでこんなにいる！ しかも、完全にやったのに！ 俺、殺したのに！」

金髪の男はもう一度駆け出し、迫る粘液の異形を蹴り飛ばす。

「まずい、これまずいよ……げほ、逃げようよ！」

「どこに！」

「わかんないよ！ でも逃げないと、囲まれちゃう。ふたりが勝てないのに、どうしろって言うの！ とにかく逃げて何か武器を探そう！」

「武器っていつでも、こいつ——あ、あああああああああああああああああ！」

槇葉の絶叫に悠美が肩を震わせた。背後から槇葉の太腿へ異形が牙を立てたのだ。

「まって、私が、私が助けるから！」

女が異形に体当たりをする。身体に粘液をくっつけ、それでも体当たりを繰り返す。やがて異形がよろけ、肉を食いちぎられる槇葉が後ずさる。

——無数の音が闇の回廊に響いてくる。

「逃げないと、逃げないと、やっぱり逃げないと無理だよ!?　ね、ねえ、こっち、手伝って、こっちきて一緒に助けてよ!」

だが、そこでまた硬直する。帰国子女の高智はもう動いていなかった。口も鼻も押さえられ、両腕をだらりと垂らし、口腔や鼻孔、さらに双眸から悶絶の泡を噴いているのだ。

既に呼吸をしてないだろう彼の背後に闇の男がいた。

「な、なに——誰こいつ!」

それが嬉しそうに悠美を見ていた。ぬるりとした闇の男。それは本当に男なのかは分からない。ただ見ているとイモリのような印象を受ける。男は二人に高智を放る。咄嗟に抱き止める二人。そこに天井から液が降り注ぐ。いつまでも、いつまでも降り続ける。悠美は気づいた。粘液に包まれた世界で跋扈する者。集まる異形は全て女だと。そして知る。幾ら泣いても、叫んでも。ここに助けという希望は無い事を——ただ、不思議な音色を聞いた気がした。

これが、彼女たちの最後となるお話——

決して覗いてはいけない、呪われた書物に記載されていた……

まさか本当に呪いが世界を侵食するとは思わなかった……燃やして捨てる。

ただ、その行動をとれなかった……私の罪。

ゆえに……

今でも、音が響いている。

ぴちゅん……ぴちゅん……と、——雫の音が響いている。

耳に響く、その澄んだ音色は溜まった水面の上で弾ける一滴の雫。

余りに静かで、耳に残る異質な音色。

でも、この音色を本当に聴いてほしいのは彼女達ではない。
終わってしまった、彼女たちではない。

とある一人の、

私が初めて恋をした……ただの少年、いや、

このラビリンスに迷い込んだが為に、

急に大人へと心が変わった……素敵な青年。

彼がこの音の意味を、

どこから、

どうして、

こう響くのか……

その音を聞く時が来たら、きっと彼は最初にこう思う。
何処かの蛇口から垂れた、

……ただの一滴。

最初はその程度の認識のはず。

そして変貌する心は、彼の明確な怖気となる恐怖……

でも、その雫こそが初めと終焉を結ぶ事象になっていると知る事ができるのなら、

今まさに危険な選択を迫られていると理解したのなら、

彼はこの音に耳を傾け、

私に興味を持って、

助けに来てくれただろうか……。

その美しい旋律と、久遠の時に始まり終わる……紅闇と紫闇へと変貌を遂げる彩られた世界に、必然は全て『終焉』に繋がる、この私だけの物語、この私が知る世界に、本気で全てを信じて……

そして……その身を任せてくれただろうか。

いつの日にか、

機会があるなら、

こうなってしまった終焉でも……

私はもう一度……

お互い魅かれた想いの中で……

何度も、何度でも、この声が届くと信じて……

全ての元凶を知りえた後でさえ……

来てくれるだろうか。

いや、きてほしい。

助けてほしい。

だから、この紅闇と紫月が新円を描く、
深淵の奥ただ中で、

例え声にならなくても、
想いの強さだけでなお、

ただ、ただ、……問いかけたと思う。

『あなたは私を怖がらないで……

ただ、傍にいてくれますか……

この私を受け入れて……くれますか……と』

序章 2

「――少しだけ、先の未来――彼の心を支配しているのは、焦燥と不安、そして確信できる未来――それはまさにパンドラの箱の中の災厄全てが彼を包んでいる中での唯一の希望――」

射抜く光は日中最高の猛威を振るう、今年二番目に暑くなるだろう、あまりにも暑すぎる夏の午後だった。

蝉時雨せみしぐれが鳴りやまない校舎の中を森宮一夜もりみやいちやは駆けていた。

周囲には、一夜の他に人の気配は存在しない。

おかげでリノリウムの廊下は駆けるだけで音が甲高く反響する。

そう、周囲に人の気配【だけ《・・》は確かにない。

しかし肩から覗く白い袖には透き通る小さな手が覗き、一夜の首筋を撫でている。

その余りの冷たさに走りながら嗜めると、背後の幼なすぎる少女は、愛らしい小鼻をうなじに寄せて、透き通るような、いや、本当に透き通る肌で、彼のうなじを撫で続けて、まるで、その首を今すぐ斬り落としたくて愛おしむようにさすり続け……耳元で鈴音のように笑うのだ。

『急げ、急げ、はやくしないと帰っちゃうぞ』

「解ってるよ。せかすな。でもようやくって感じだな……本当に該当者なんだろうな？」

一夜は廊下を突っ切り階段を飛び降りると、校舎裏の体育館に踊り出る。

その横にある雨ざらしの途端屋根の連絡通路を駆け抜ければ、カビと塵で黒く変色した、上品にも綺麗とは言えない校舎裏が覗いてくる。ここは屋外プールへと続く連絡通路。

そこを走り続けると、ようやく見えるのは人だかりだ。

一夜は舌打ち一つ、走る威力を落とす事なく、人だかりを掻き分ければ眩しい陽光が校舎の暗がりに慣れた瞳を細めさせた。

そこは、屋外プールで揺らめく煌きやかな反射光が裏庭の木々や周囲を美しく彩る空間。伸びた雑草からの風が夏特有の草いきれを運び、鼻腔を強く刺激する。そして中庭中央、そこに一本の櫟けやきの木があり、一人の女性が佇んでいた。

草いきれに混じるフローラルの香り。

それは、間違いなく彼女の黒く長い、足先まで届きそうな髪から漂う、甘い香り。理性すら蕩けさせそうな、誘惑に満ちた、

少し危険を含む香りだろう。

そして彼女は群衆から抜けた森宮一夜が走って、ここまで聞こえる足音で、目の前に影を落とした意味を知って。

幹のたもとで自分の足先を眺めていた瞳を大きく見開き一夜を見つめ、

——本当に、信じられない。

とばかりに戦慄かせ、まるでやもすれば一瞬で泣き出しそうな大きな瞳を優しくも柔和に細め。

そして、歓喜——

だったのだろう。

心の底に隠していたものを、今まさに浮かび上がらせ。確信した。

選択は間違っていなかったのだと。
自分の心に素直になれたのだと。

精一杯の声で、阿も咩もない、それでも嬉しくて震えてしまう唇に任せて、想いの丈を一気に開くのだ。

もちろん、乙女のこの状況での言葉は、誰でも、そしていつでも、
内容は、とても簡単。されど、自殺する覚悟に匹敵するだろう、日本人女性ゆえに純粹な
心で――

遙か未来では完全に消えてなくなるこの神代からこの時代までにして最後の純粹かつ曇りない眼で――

想いを……

『――森宮一夜君、ずっと前から貴方が好きでした！　つ、付き合ってください！』

告げた。

そして一夜は知る。

はつきりと、彼女の言葉にしてくれた迷いなく曇りない心――ゆえに彼女の真剣な思いを理解。嬉しい。本当に今一番幸せになれるかもしれない瞬間の前にいる――そう思えて、なお、彼女を見る。

目の前の巨木の下で一人たたずみ、誰が知って広めたか、遠巻きに見る野次馬たちの注視の的。

いつからそこにいたのかも判らない、少し汗ばむ彼女が身をすくませ、体を抱き留めた腕に、小さな水の雫は頬を伝っている。彼女の長くこの暑い世界で、雑草が青々とした大地の上で、一人、森宮一夜という男性を、怯えながらも期待を背負って待っていた証。

だから、彼女の今の言葉は、最高の勇氣。
だからこそ、ぎこちなくも硬い笑み。

切れ長の眉、柳眉から伸びる鼻梁はなだらかな稜線を描き、薄く塗られたルーージュは唇を柔らかに引き立てている。風に靡く腰まである烏色の髪。胸元にある上級生の証たる青のリボン。は激しく揺れて心の緊張を物語っていた。

森宮一夜は、そこで考えた。

考えるしかない。

何故なら次を取る選択肢は既に決まっているからだ。

普通であればYESかNO——だ。

だからそれらを汲んでなお。

全てを籠めた言葉を、大切に、心の発射台へと設置する。

それで彼女への回答は即座に終わり、

青春が始まるか。

互い悲しみの夏の思い出にとどまるか。

そのどちらかに決まる。

暑さでも、そして緊張でもない汗が一夜も頬を伝わせる。

そして彼女は、唇を振るわせ笑顔を浮かべた。

——何か言おうとした。

けど、いえなかった。

もう、本当に力尽きてきたのだろう。

精一杯の勇気からの純真な想い。

少女の願いと希望を込めた言葉。

それを彼女は真剣に言い放った。

だけど……、一夜には彼女からの、彼女の人生最大にして最初で最後かもしれない想いに——正しい答えでは応えられない。

こうしている間にも刻一刻と、戻せない砂時計のように、限りある時間が過ぎている。

なにより目的がある。

——それは、彼女に明確な——【殺意】——を。俺に抱かせる事。

ここで、彼女に暴言を放つ。

それは決まりごとだ。

奴が望んだ切望であり悲願への第一歩。

もしくは、これこそが最後の終焉。

だからこそ、度胸も胆力も、そして戦いに対しての強さも兼ね備えた一夜ですら、心臓が破裂するほどの嫌な音を立てている。

——だめだ、忘れるな目的を！

——考えるな現状の悦びを！

——考えれば考えるだけ、

——時間が、無い！

なにより、見られている——

それは周囲に集まってる人だかりの視線だけではない。

言わなければならない。

覚悟してきたのだから。

決まっていた言葉は用意している。

でも、ここに来て、迷う。

何故なら彼女は余りに純真で、美しくて、一目で惚れてしまえた女性だったから。

「一夜……くん？」

期待と不安のストップした時間。

その意味が分からず、あまりに美しい黒髪の彼女は色濃い眼差しを向ける。

震える体、それは野獣に狙われてるリスのようにか細くて。

でもブレザー用ワイシャツと上級生の首元へのリボン。

夏の学生服ですらわかる、彼女の美しくも魅惑的なプロポーション。

小さな小顔に柳眉な眉。優し気に細められる長いまつ毛の美しい黒い瞳。

眉根から鼻梁へと描く稜線はなだらかで、簡略しても、長く例えても、彼女を言い表す言葉は、

——ただ、絶対的に美しい——

そんな女性からの告白は、断ることも、断らなければならない理由さえ存在しない。

だけど——

そこで一夜は深く息を吸う。

そして吐く。

——そう、だけど、だ——

度胸をこめ、真剣に、彼女の向ける瞳に失礼の内容。

精一杯、言葉をまとめ、それを唇に乗せる。

ただ、それだけ。

上級生に、一夜は信じる想いのままに口を開く。

「っ……」——でも、言葉が出ない。

背中を衝く焦燥よりも、心の奥に潜ませた罪悪感が鎌首を持ち上げている。

これから彼女がする悲痛な表情。

それが予想できて、馬鹿げた事は止めると何か誰かに訴えかけられているようだった。

『一夜……』

肩の幼女が、誰の目にも見えない幼女が、一夜の心境に気づいて優しく頭をさする。一夜の困惑を哀れむように優しく髪を摩っていく。

——確証はないんだ。

けど、もう自分だけの問題じゃない。

声が聞こえてくる。

それは過去に存在した言葉。

【——女を蔑め。殺意を含んだ心のままに——蟲が飛び、女は泣き崩れる】

そうすれば今度は女が真の殺意を宿すから……

脳裏に残る抑揚の無い眩き声。

それに後押しされ、過ぎる記憶の邂逅を殴り伏せるように。

だから、

心では、

——ごめん——

と、叫び——

「——冗談じゃない！ お前自惚れてんじゃねえか？」

最低な、自分の言葉を解き放つ。

眼差しを^{すが}眇め、彼女を馬鹿にした仕草で睥睨する。

ここは校舎の裏庭。

足元を隠すくらいの雑草が広がる青々とした夏の匂いが充満する大地。

そこにたたずむ一本の大樹。

ここで告白すると両思いが確実。

などと、噂された場所。

だから、学園一の学園創立以来初めて頂点になると噂される美少女と呼ばれた彼女が、とある青年を呼び出し、告白をする。

という噂は、目の前の彼女が友達に話して相談にでも乗ってもらったのだろう。瞬く間にその友人から、他人へ、彼女の行動は喧伝され、今では校舎の学生で知らないものはない。

昭和の終わりが迫ろうとしている、アレがぶったおれて緊急入院、退院日時不明。もう後がない。ならば昭和は終わる。

次の年号はなんと呼ばれるのか……

これは、この物語は、実際にあった出来事と予想するに難しくない、

……ノン・フェイクション……

……ホラーという形に隠した、いつか、誰かが告げなければならぬと知りえた男が綴る物語……

……今も、アレは、この国のどこかにいる。

……今も、小さな彼女は、私の肩にいる……

……今も、あの別れの意味を探している。

……今も、後悔し続けて生きている。

……今、唯一の救いと悲劇は、自分のリミットが終わろうとしている事……

……これを真実ととらえてもらえるのか、それとも寓話や嘘物語と捉えられるのか……

……できれば後者だけは、掴んでほしくない。

……あの夏の日に奇怪な日々と現実。

……その証拠が、ほら、目の前の、彼女から始まっているのだから。

とある年の、

すさまじい暑さを叩きだした、

この時代ではありえない熱波に晒された大気。

まさに夏の……午後。

そこで行われる告白。

ゆえに、校舎の窓、そして校舎と体育館やプールへと続く連絡通路には、生徒が固唾をのんでみまもるほど、すさまじい数のやじ馬があつまっている。

そして誰もこの裏庭と称えられた、あまりに陽光ある雑草地帯にはいない。

今、

この瞬間、

ここは、

美しい女性と一夜だけの空間だから。

それが分かるから、誰もちかづかず、遠くから話を聞いていた。

そして一夜は言葉を放った。

最低な、ただの一方的な付き離しの言葉を――

と同時だ。

吹き込む風は草叢をなびかせ、

櫟の梢を大きく揺らすと蟲が――

油蟬が一斉に飛びあがった。

――まさに、予言通り……か。

一夜の唇がかみしめられる。

ならば先が見える。

それを受け止め自分がどうすべきかは、昨日、肩に【いた】彼女と綿密に相談した。

目の前の女性を傷つけたこと。

傷つける事――だけではない。

ここから始まる現実が、ある奴の、目論見通り、予言通りに進んでいること。

それはつまり、一夜が行き止まりしかないラビリンスに放り込まれ……
ようやく見つけた出口に……

『出口のない迷宮へようこそ』

……そう、書かれたような、絶望感が急激におそってきたからだ。

思わず、

最低な言葉を放った一夜が、自分で選んだ言葉と目の前の現実、全て予想通りが、まさか現実には体験すると精神的にここまでくるものとひどく後悔するほどで――

もう、めまいで倒れそうだった。

本当に倒れそうなのは……彼女なのに。

でも、予言の中に驚くより、肩を小刻みに震わせる上級生が瞳の色を崩した事のほうが、一夜の四肢を強張らせる。

拭う事も許されない光が頬を伝い、

一夜は今更ながら恐怖を覚える。

「俺は、おまつ、お前に興味がな――」

だから、この先に少しの変化はおきないかと、知りうる未来を変えるべく、彼女に、「ちえ、残念」などと、ギャル的な言葉でも出させて、皆の中へ鼻で笑って帰ってくれ。

――そうすれば、俺も傷つかないですむのだから。生涯背負っていくだろう目の前の女性を悲しませた現実には確実に奴の思い通りのトラウマ物になる。

――だから、鼻で一笑して、俺を笑いものにして、去ってくれ……

そんな、願い、だった。

だからこそ、

今の言葉は続けるべき言葉だった。

しかし、その言葉は途中で大気から、人々の耳朵を揺さぶるだろう言葉は、描き消えた——
語尾を掻き消したのは、天をも劈く絶叫だった。

周囲から罵声が聞こえる。

一夜は喉を強く鳴らし、その場から逃げるように足の指に力を入れて踵を返す。

そして言葉よ必ず届けと、

あの日相談した言葉を、

最後の言葉、

この現状を覆すべき必要悪の言葉を、
意志を込めて呟いた。

『——おい、女！——知ってるか？ 学校の図書室には、お前みたいなどん臭い女の、どんな願いも叶える魔法の本ってのがあったってさ』

——全ては決まっていると、あいつは言っていた。

校舎に居残る生徒や教師、そして『警察』までが、沸き上がった絶叫に何事かと窓を開いて覗き込んでいる。

その本校舎の階段備え付けの窓——

四階の窓——

そこから、こちらを怜悯に見つめる、女がいた。

——全ては歯車の一部だと、お前もただの歯車だと、連面と続く物語の一項目。そこに書かれた、ただ読み捨てられるモブでしかない。

そう、諭すような眼差しと共に、

あいつはそう言って微笑んだ。

彼女が悲しみと、それを助けるために胸の中に一気に膨らむ、目の前奥で囲んでいる学生たち皆の前で恥をかかされた――

ゆえに、柔和な眼差しが悲しみから狂気へと変貌。

その怒りを含んだ眼差しを向けて見つめている。

それが一夜には悔しくて、

本当なら了承してもいい――あまりに美しい先輩という美少女をもったいなくも、そして、嬉しくもあるのに――

今の自分がある種の物語に綴られたモブであるがために、弾かれてしまっている現実に気づく。

捨てられてしまう。

結末がわかってしまう。

それを頭に響かせ、

声を押し殺し、

一夜は噛みしめた唇から声を張り上げた。

奴に一矢を報いるため、

――わざと！

――決意の意思を一切曲げない誓いとして！

――そして奴が望んだとおりの言葉を！

――ここで一気に解き放つ！

放たなければならない。

それが、ここでの本当の役割にして、

物語を強制的に裏で操り、

自分が正義の主人公となって、

起死回生の一撃を、

あいつに放てる機会を作る為。

奴の思惑にのっかってこの言葉を力強く吐き出した！

「聞けよ女！――

その本は、

女が望めば何でも叶う！

人を、

俺を！

完全に殺して――

時間すら無かった事にも出来るんだ！」

背後から漂う明確な寒気――それは、殺意。敵視の双眼から繰り出される光速弾なみの速さで自分の背を射貫いてくる。

碎かれた恋心から湧き出る憎悪が貫いてくる。

一夜は、それもしつかり受け止めている。

全てが終わった――

その先も考えている。

でも、それは背後からだけではなかった――

彼女から視線を反らすために踵を返した先、目の前に見える校舎の四階。

そこから見下ろす――女――が、いる。

その女は闇に包まれた眼差しと、闇ゆえに産み出された微笑、

瞳に燦る怨念を宿した、いや嘲弄と蔑視、侮蔑、そして気高くも邪悪。

まさに人を呼び込み、暗い世界で嬲り殺しにして享樂を、狂気の悦樂をむさぼるような存在

それが校舎の四階階段光の取入れ窓から、
確かに、

……見つめている。

だからこそ一夜は睨み返し、

奴が、その眼差しの真意に気づき、

憤怒の形相……が……すぐさま柔和な微笑に変わる。

それでも――

――役目は、果たし終えた――

と、わからせるために、

衆目の視線を物ともせず、誰にも自分が向けた矛先の先端がどこにあるのかを悟らせない
ように轟雷のような咆哮で言い放った。

「――これで、これでいいんだよな！　これが望みなんだよな、この、――悪魔がッ！」

声が校舎に反響し、木霊となって虚空へ消える。

放たれた言葉に、

『どっちが悪魔だ！』

と、野次と罵声が飛び狂う。

皆が皆、

学園一の美少女。

恋の噂も一切なく、

才色兼備な彼女の一世一代の大告白に立ち会い、

それをふったという、ふざけた男へ、

蔑視と、侮蔑の言葉を叫んでくる。
だから、それを心から受け止め、
なお四階へ眼差しを向ける。

——と——

再び見上げる校舎の一角に、一夜にとっては明確に敵となった少女の姿は既がない。

でも、代わりに——音はした。

——ピチョン——

どこかで、聞いた事のある——一滴の雫の垂れる音が聞こえている。

一夜は……その音を確かに聞いている。

今も聞いている——

遙か未来でこれを執筆している最中も、聞いている——

生涯消えなかった……永遠に垂れ堕ちていく……一滴、一滴の、雫の音。

どこかでも聞いている。

そして、

いま、

まさに、

ここでも聞いた。

なら、物語は動き出す。

そう、確信が生まれる。

思わず肩に座る小さな淑女（レディ）と視線を交わす。
彼女は颯然、うなずいた。

もう一度、モブ——群衆 1
ではなく、

主人公へ舞い戻ってその舞台袖から踊り出てきて収まったからだ。

だからこそ、一夜は動き出す。

最後の戦いでハッピーエンドを引き釣り出すために。

この話は、この雫の物語。

その意味に深く深く刻まれている、あまりに非情で苦しみぬく邂逅を望み、いつか叶うだろう代償に、あらゆるものが持っていられる悲しみを綴られていた……雫の物語。

そしてこれから話す事は、

削られた文面宿す、

不可解な本にまつわる物語。

その冒頭は、

いつ、

どこでも、

とある場所にて、

こう記されていた。

『学校の図書室に、とある一冊の本がある。

決して手に取ってはならない一冊の本。

血と、魂と、器を棺に収める古い書物。

人に望みをもたらす災いの目録。

愚者の記憶。

訪れる使者に虚栄を。

穢れなき聖者に栄光を。

それは、どの学校にも必ず存在している。

それは、どの時代にも必ず存在している。

それは、どの棚にある訳ではなく、左手から四列目の棚の定位置に、必ず存在して置いてある。

それは、どの場合にも上から四段目。

それは、どの位置でも左から四番目に立てかけてある。

決して魅入られてはならない獣皮製の本。

読み手を捕らえる不可視の鎖。

そこには、生徒の事が書いてある。

そこには、者が垣間見た、終わりの言葉が書いてある。

そこには、状態では全てを見る事が叶わない。

そこには、人の項目が前半を占め、後半は新たな者の訪れを待つ。

決して記憶してはならない、題名も著者も無い、細い黄金の蔦が装飾として絡む紫色の美しい本。

美しすぎる道を示す小さな本。

手を出す者の魂を計り、本は所持者の技量に問いかける。

そして、人は、捕縛されるだろう。

そして、人は、決断に迫られるだろう。

そして、人は、あやまった場合のみ、助かるだろう。

そして、人は、……定めに従い逢魔の現世から去るだろう。

そして、人は、還されるだろう。

光ある者に真理を、愚者には罰を。

決してその本を開いてはならない。

開けば必ず……

……彼は来る……』

……そう、記載されていた……

……いつか聞いた、優しい音色を出す小さくも魅力的な唇から……

……幾度も、何度も、記憶の無い世界で……

……救いの一手と、聞かせてくれたのだから……

第一章 第二分別書庫の少女との出会い。

冬名残を収めた桜舞い踊る四月の始め。森宮一夜が通う木白市立高校は、第十三期生の入学式を行っていた。

長く、自己陶醉でもするかのように、自分の演説に悦入る校長の長話はどの教育の場でも同

じらしく。

皆が幾度もあくびをかみしめた頃。

粛々と進む式典の最中に事件は起こった。

木白高校の校舎裏を流れる運河から、強烈な腐臭が開放された講堂に漂ってきたのだ。それは余りに酷い臭気で、新入生への手伝いに参加してくれた上級生に保護者や教師、皆が皆、嗚咽を催し、人が人を追いやり押し潰す避難騒ぎへと発展。

——式は、この高校の新入生が一堂に会しただけで終わる。

時は西暦1990年。

昭和のバブル期も終わり、平成へと移ったばかり。

昭和天皇が死ぬとき、必死に生かそうとした医者の手により無尽蔵状態で皆の献血血液を使いまくり、その総量は25mプールを数杯分。

この事を知っている人はかなり多く、当時の大事件になった。

そしてみな、忘却する——

火消しが行われているからだ——

連日このことで問題化してたはずなのに——昭和も昭和天皇の死とともに終わり。時代は平成へと移った。

虚ろな欺瞞が塗れる新聞などに皆が目を通し——

皆が記録媒体から見つめられていく——

記載された内容は——隠せなかった世界を、垣間見た世間への忘却現象。一切の報道を消し、全て忘れ去られていく。

でも、

本は、

新聞は、

残る。

残す。

意思をもって。

例え後世に誰の記憶にも残らないよう報道規制されたとしても。

この物語も、そういう根源的な虚構が背景にあって、動き出したのではなかろうか。後に10年以上経ってから、この物語の登場人物となってしまうた、一夜によって語られる。

——彼の通う高校。

事件の始まりと、一夜によって収束される、たった一個だけの物語。

舞台は彼の高校。

バラ色の学園生活。

ブラバン以外、有名な部分のない、当時偏差値37の学校、木白高校。

全国をにぎわせた高校。

近くの工業施設は市のゴミ集積場。

後に、ダイオキシンの220ppmを超える工業排煙がでてるのを隠蔽し、マスメディアによって問題化、騒ぎになるが、それも報道規制か、一瞬で報道は止まる。

言論統制——そして平然と行われるマラソン大会——隠蔽された真実。

真実を残す物質は、見方を変えれば向こう側から見る生命体——

そう、説いた学者もいる。

それらを踏まえて——物語が、開いていく。

件の校舎裏を流れる刀禰運河。

ここから漂った異臭によって全てが始まる——

春の爽やかな風吹く世界に身を浸しながら、新たな生徒が集まってくる。

高校一年の入学式。

未来に希望を。

そして絶望を。

全てを伝える鐘は、今、遂に鳴り響く。

入学式の体育館に、異臭が流れ込んできた。

いや、異臭と呼ぶには表現がぬるい、腐ったヘドロの中へ嘔吐を混ぜて、煮詰めたような臭いだ。昨今問題視されてる近辺の工業排煙や廃液の影響なのか。

まるでこの年の新入生の前途を暗示するように……、その悪臭は人には耐えがたく、式は中断、生徒と父兄が我先に体育館から校舎へ殺到する――

押され、倒れ、悲鳴をあげても踏みつけられていく上級生女子を見つけて、慌てて抱き上げたのは、森宮一夜だった。

その行いはささやかな救助活動。
されどこの出来事でも裏がある。

その中心で、女子を踏みつけて真っ先に逃げた男子生徒へ怒声をあげながら。

その時、一夜は確かに聞く。

確かに、

どこかで、

一滴の雫が水面へ落ちたような音――

やがて警察やマスコミまで現れるこの異臭騒ぎは事件と化し、されど翌日、教師からは『原因不明』で済まされてしまう。

マスコミも、ヘリも警察まで集まった騒ぎ、なのに翌日の地方欄にすら、記載されない。

全ての生徒が不穏に思う中、噂好きな生徒の手により、瞬く間に噂が噂を呼び尾ひれがついて、それは奇怪な事件として広がり、これは新入生が呼び込んだ災いの始まりだと、誰かの手によって喧伝。噂は広がる。

――呪いを喚びこんだ第十三期生……と。

――ピチョン――

一滴の雫が、溜まった水面の上で澄んだ音色を奏でたような気がした。

一夜は、ゆっくりと教室で目を覚ます。

今はあれから二か月後の後半。

六月最後の週だ。

目に飛び込むのは巨大な黒板と、背中を見せる現国の、どこか愛くるしい女教師。腰まで伸びた髪をポニーテール。

男子の好意的な眼差しが、あちらこちらから見える。

端的に言えば新人美人教師という奴なのだろう。

が、一夜はあくび交じりにあきれながら机につつぶした。

そのまま顔だけ挙げて正面をみれば教師の頭上の時計が二時間目の授業終了まであと20分もあった。

黒板で記載しながら必死に説明する女教師はたぶん本当に若い。たぶん大学卒業したてで23〜24歳くらい。ぎこちない説明は、危なっかしくも、少し新鮮。そばかすもチャームポイントな教師がチョークを走らせる。

この光景を見る限り、少なくとも男子の中でファンができるのは時間の問題、いや、もうファンはできているのかもしれない。

そんな人気の若い女教師から視線を外し、外を見れば、大雨が降っていた。

梅雨の湿った空気が衣服を重くさせる。

粘つく不快感湿度と熱気がかもしだす最悪のハーモニーのせいかな。衣服どころか、一夜の少し長い前髪すらべたつかせるほどで、なんで学校にはクーラーを入れるという発想がないのか。

そこまで考え出していたら、気がつけば終礼の鐘が鳴っていた。

大きく伸びと同時に身体を捻って強張りを解す。

と、一夜は隣の席で、ノートと教科書から作成し、衆目の眼差しを阻害するバリケードを作るお隣さんを発見した。

隣席に、勉強どころか外界を完全に遮断する、女子がいた。

さすが偏差値37の高校。

女子までつわものだと、感服してしまう。

しかも、隣の席なのに一夜はまだ彼女の名前すら知らない。

長い前髪に、瓶底眼鏡で窓辺から差し込む青白い大気の色を含んだ陽光を、瓶底眼鏡で怪しく弾く彼女。

体系は小さく、下手をすれば小学生として電車やバスに乗れそうな、それほど小柄な女子がいる。

髪の長さは後頭部から首の付け根あたりまで、前髪の側面を長くした少女。

髪留めに、不思議な真珠のような珠を二つ付けた髪留めをもみあげの中途、丁度頬より少し下あたりにそれぞれ一個づつ。

そんな瓶底眼鏡の少女が必死に机に向かって何やら没頭中。

聞きたい！

何してるか聞きたい！

だけど難しい。

何故なら彼女は一夜との席替え初顔合わせで挨拶したら黙殺。

授業で教科書を忘れて一緒にみさせてお願いしたら、黙殺。

「あの、ねえ、お嬢さん、見事なバリケード作って……何してるの？　もう休憩時間で黒板の記載分も消されちゃってるけど……」

それとなく話しかけてみた。

どうせ、黙殺と知りながら。

でも初めてまじまじと、真横からとはいえ直視した隣席の少女。それはどこか儚くて、どう表現しても気薄な印象。

そして、失礼な言い方をすれば――

一言で済む――

綺麗じゃない――

顔はともかく、服装が。

さらにぼさぼさ髪と瓶底眼鏡が。

寝癖混じりのセミロング。

首元にも届かない髪をふわりとさせる彼女だが、柔らかすぎる髪の仕事か、とにかく見事に跳ねまくり、唯一長くのばされた髪は前髪のみが重苦しい。

さらに一夜がよく見れば、ブレザースカートには、まだ入学して二か月経ったばかりなのに、皺が多数見受けられ、それゆえに……みすばらしく？——端的に言えば女子特有の清涼感や色気や、愛くるしさや、フェロモン感などは皆無。彼女の挙措は我が道をいくタイプか？

小さな小動物チックな彼女、一夜は少なからず興味を持つ。もってしまったのである。

しかし、入学式時同様に、今日も無視。

だから、今回は言葉を選んでさらに続ける。

「あの、失礼、お嬢さん。ちょっといいかな？」

必死に話しかけた。

けど……無言——。

そもそも彼女はいつもこんな感じ。仕方がないのかもしれない。

いつも唇をへの字に名前すら解らない寡黙少女。

もしかしたら一夜が嫌われてるだけかもしれないが、そうなれば理由が知りたいものだ。そんな彼女に現在一夜は悟られないよう彼女の後方。うなじから背後を覗く。と、見えたのは綺麗な引かれた粹組線。

起用に鉛筆で形作られたのは人の形。

絵心の無い者でもすぐ解る。

「漫画、好きなの？」

「——ひっ!？」

ついに反応してくれた。

でもそれは一夜の望む反応ではなく、警戒から来た悲鳴。

そして心から発せられた——ちよ、ふっぎけんな、女子にいきなり背後から話しかけるとか頭膿んでるんじゃないの！

死ね！——的な悲鳴。

昭和のころそして平成初期は、女子と会話すると、必ず男子が『ひゅーこいつらつきあってんの？ 夫婦なの？』などと、小学生餓鬼大将がマジ存在してて——内面を見れば、自分が女子に嫌われてるから、女子と仲いい男子を見つけると、潰そうとする。そして思春期になって、餓鬼大将は今までの小学校での持論を反転。女子にはなしかけ、なんとかつきあおうとする。

だが、初心な女の子は、その小学校当時の価値観から身を守る術をいまだ強く持っていて

「こういう反応になるよな……」

まあいずれにしろ、だ。いきなり背後からの言葉に彼女は肩まで跳ねあげ、頬は瞬時に耳と共に真っ赤に染まり、慌ててるのか、怒ってるのか、ちよっと表情わかりづらい前髪と巨大瓶底黒ぶち眼鏡で、状況は見事に読み取りにくい。

それでも彼女を振り返らせたのは成功、というべきか。

……でも……

「みた？」

それは、極刑に値する事をやらかした者への、ヤバイ雰囲気全開での咎めの言葉。

しかし、そこで小さな事件は起きた。

彼女が身動きした拍子に、彼女は自分の肘で自分のペンケースを弾いてしまう。

——ガシャンと甲高い音。

咄嗟に赤面から蒼白になる少女。

少女は真っ先に散らばったA4用紙の白紙やペンケースの中身全てを慌ててかき集めるため

にかがみこんで、一夜もさすがに色々まずいと判断、拾いにかかるが、一夜は彼女のスカートから小さな粉が零れるのを見る。

——なに、今の粉。

同時に、夏のお約束発生。

彼女の胸元が、湿気と汗で、少したるんでいたのだ。

とうかサイズがあつてない。

無理してMサイズの学校指定夏服シャツだが、どうみても彼女はSサイズ。ブラなど——と、そこで一夜は軽やかぶりを振る。

だから、必死に散らばった用紙を拾うのだが。

桃色のブラジャーと、葡萄のような大きな首飾りを見てしまったのは、いたしかたないこと。ブラまで垂れてたら偉いものを目撃しただろう。そう思って、必死に這いつくばって、二人で拾いあう。でも、その瞬間、どうやら彼女の洞察力は半端ないみたいだ。

いきなり、小声で、ドスきかせて、「みた!？」同じ質問をされてしまう。

しかもはっきり胸元を隠された。

違——と、一夜は言葉が出かかるが、

『何こいつ、漫画描いてる——!?』

頭上で放たれた奇声に妨害された。

仰げば教室中がもう好奇の眼差しを向けている。

「うそ、やだ、漫画学校で書くなんて、この子、漫画マニア？」

「これ、アニメのやつじゃね、いまやつてる。じゃ、アニメマニアか！」

そんな声があちらこちらから集まった者たちの声で聞こえてくるのだが。

もうそんな関係ねえ、とばかり少女は一夜の眼差しをまさに射貫くように見つめている
ので——

「いや、見てないから！ 首飾りと、可愛い鎖骨だけ」

咄嗟に謝るが、「あと、胸元……」と、謝罪すると。小さな唇からギリッと歯ぎしり、それと平手が飛んできた。

軽快な音が鳴る。

実は一夜には格闘技の心得がある。

レベルは児童空手大会から負けたことはない。

小学校、中学校とも偽名で（祖父の命令）で参加。

負けたことはない。

つまり全国レベルで1位。

しかも普通の黒髪で目元を隠したどこにでもいる男子をやっているはずなのに、表彰台に上ってトロフィーや証書を貰う実力者。

実は負けたことがない。

必ず空手雑誌や格闘技雑誌のインタビューがあり、何故か次世代の魅力的な美男子格闘家、などと記載されていた。（この時代イケメンという言葉はない）

——まさか、不良によく絡まれるのって、こういう大会に出て、さらに雑誌の片隅に載ってたから？ いや、あんなアンパンとタバコしか吸わない連中が知るわけない。そもそも雑誌読もうにも文字だって、読めるかどうか——

注…アンパン——昭和と平成の時代に活躍した液体。（人格破壊的意味で）

政府が必死にこの存在を隠し、今なお絶対に表にでないように、アンパン？ アンコのパンでしょ？ と、言わせるもの。

実際は違う。

どこのホームセンターでも打ってる塗料などを落とすために売ってる『シンナー』これをビニールにいれて、さらに周囲からわからないように紙袋に入れ、その袋に口を突っ込み、下から幾度も押し上げ、シンナーの臭いを吸う——今でいう麻薬の原点である。脳みそ狂牛病のプリオンと同じ状態だ。

さて物語に戻そう。

今の平手打ち。

一夜にとつては躲そうと思えば躲せたはず。

だが、今のはどうにも避けられなかった。

何故か避けちゃいけない気がして。

——パチン、と、鋭い音が教室に響いた。

揶揄ってた男女も、さわいでた唇を閉ざす。

それくらい場を逸する音響くピンタだったのだ。

そして少女は、

「……最低……。このド変態ッ！」侮蔑の言葉を飛ばしてきた。

後々考えると、これが少女と初めて出来たまともな会話だったのかもしれない。

そんな彼女は髪の手々を怒りに跳ねさせ、いや、最初からボサっているが、柄付きの鞆に用具を荒々しく仕舞い、用紙をファイルに納めると、栗鼠のように廊下へ走り去ってしまうのだった。

「……ふ、小動物チックな娘よのお……ういやつ、ういやつ……ふふふ」

と、眼差しを閉ざして微笑を浮かべる——心の中に何かみえたような——よくわからない感覚に襲われる一夜だった。

「おつかつしいなあ、……なぜこうなった？」

一夜は、ただただ空席になっている隣席の少女の端につるされた鞆に目を落としていた。

授業も半ば、いや、もう終わるのか。

とにかく彼女は行方をくらませたまま、戻ってこないのだ。

狩りにも低レベル偏差値の学校。

一夜みたいに特別な理由があつて、この日本、いや世界レベルで底辺ですな高校だ。もしかしたら不良どもに絡まれて、どこぞの廃屋か山の中か、それとも校舎裏か、どっかの男子トイレか、——連れ込まれて、あの薄い本のように！　あの薄い本のように！

エッチな事されて、少女から女へ、女から雌豚へ、クラスチェンジされてるのでは。

今頃調教された体は男を求め――

「お●ん、さいっ
こおおおおおお
おおおおおお！」

とか、どっかの闇掬う邪悪な場所で淫魔みたいに絶叫しているのでは！

「んな訳ねえか。授業のない見回りの先生が数人で事件が起きないように、このめっちゃ暑く湿度の高い世界を闊歩している。しかもパーチクリンの不良だのとはかく、他に表現のしようがない『糞つ垂れた番長』もどきも、昨今じわじわと見なくなった。その状態で子リスのような彼女がとつかまつてるとは思えない」

——じゃあ、何故もどってこないん？

「いい加減機嫌治して戻ってくるのがヒロインってものだと俺は思うんだ？ いや、あの身だしなみ一切無視ではヒロインは無理か……、腐れた不良どもも、他のちゃらけた化粧しまくってる女のほうによっていくはず。じゃあ、なんで？ 結局……帰ってこないって、なんかヤヴァクね!!」

三時間目が過ぎ、四時間目が終わっても、怒れる小動物は姿を現さなかった。

怒りに任せて帰宅した可能性が無くはないが、机に吊るした学生靴は今も健在で校内にいるのは確かだろう。

それでも一夜は心配だ。

実際あれだけ周囲に漫画作成を晒されて、今も噂は持ちきりだ。『自分らとは違う人種——漫画マニア、もしくはアニメマニアがいた、【きもちわるゝい】』（注釈…昭和時代はアニメ漫画

見る人を蔑視、および差別対象と迫害対象、イジメやすい対象とされていた。ゆえにオープンオタは、集団で言葉、及び暴力が振るわれ、気持ち悪がられさらに馬鹿にする対象だった）そんな奇異な者を見る眼差しが未だ教室中に蔓延している。

——やばい、本当にどうするか、クラスの馬鹿にした空気を打破するために、率先してけらけら笑う女委員長や、それにへばりつく男どもを皆の前で拳一撃粉碎の一手で葬って、馬鹿にしたら、あいつに殴られる、という風潮にすべきか。言葉で皆に伝えても笑うだけ、どうすれば——

そう真剣に悩む、まさにいじめられっこを作ってしまった一夜は真剣に考え始めた。始めた。始めた。まさにばんばんが痛くなるまで——

そんな時だ！　ほんわかつボイスを耳にする。

「イチヤーン、一緒にごっ飯、たっべようよっ！」

そんな悩み多き少年の頭部を、舌足らずな声と——わざとだろ！——柔らかな膨らみ二つがかりで押しつぶしてきた。

「……重い。重いです。都姫夜^{つぎよ}さん。てかでかいお胸があたって、きもい」

「重くないよ。でかいお胸じゃないよ、それと、きもくないから！」

「えー、ソロモンの二子山みたいにでかいし、重いってば」

「誰も食べる相手の居ない可哀想くくな一夜きゅんの為に、お姉さん席離れてるのに、女子に揶揄られるのも覚悟で来たんじゃないかね。寂しい事言うにやよ」

数学と物理のコンボに力尽きたか、重量感溢れる二物で一夜の頭頂部を包み込み、腰まで伸ばす長髪で一夜の頬を撫でるのは幼馴染の聖野都姫夜^{ひじりのつきよ}だ。

柔らかな垂れ目や眉根からの鼻梁ラインは美しく、薄桜色の唇はぷくりと艶やか。さらに長髪を纏める赤いリボンもチャームポイント。しかも生まれは一日違い。同じ産婦人科で同じ病室。クラスのイベントを必ず同班した腐れ縁の美少女委員長だ。

「ちゆかれたあゝ本当にひどい先生だよ。一時間に3回も当ててくるんだもん」

「あゝ、あの先公は巨乳好きだからな、せいぜい暗がりの体育館倉庫や保健室にはいかないほうがいいぞ。あのエロジジイ女探してうろつき回ってるらしいから」

「そうなんで、本当にきをつけるね。ふゝこれも巨乳で美人ちゃんな都姫夜ちゃんが乗り越えない試練かな」

「知らん、俺は巨乳に興味がない」

「ひどい！」

「それより聞いてよイチヤン」

「なにを？」

「今日もまた放課後は委員長さん会議なんだよ。ひどいよ、一緒に帰りたいよ。イチヤンに変な虫がついたら、私はやる！」

かなり物騒な事を言い出した。

こんなんが幼馴染って、ちょっと怖い&重い……（求愛的な意味が）

「もう、イチヤンの頭の上で休ませておくれでないかえ？」

そういつて、胸で押しつぶしてくるので――

「ふざけんな」

頭の上に顎を載せて体重を掛ける美少女の蟬谷せみかみに、一夜は指の第二関節で左右から突く。

「――ぎゅっえッ!？」

女子が出してほしくない奇声を発した。

「ひど、ひどいい、お嫁さん入り前の女性を傷物にしたあ」

「誤解を招く言い方すんな。普通に座ればいいだろ？」

「仲の良い幼馴染。しかも女子は攻撃的捕食獣として俺にセまっている」
「ちょっとモノローグっぽく言ってるけど。都姫夜ちゃんは、捕食獣じゃないからね、攻撃的でもないからね」

必死の反論。でも、それから一夜と都姫夜の関係を理解するクラスの生温かい視線を受けつつ、一夜は淡々と弁当を用意する。

「ご飯食べたあとお、トランプでも……しない？」

「まあ、ほかにやる事なかったら」

「えへへ、負けないよお」

都姫夜はそう言うと言の居ない隣席を引き寄せ食事を始めていくのだが。さっそくピーマン炒めからピーマンを取り出す一夜の弁当箱にぼい。ぼい。ぼい。だから一気に固めて都姫夜へピーマンを雪崩の如く返上する。それでも都姫夜は投げ入れてきて——両者の猛攻が加熱し始めた頃。

「——ひゅう♪ 相も変わらず仲良ろしいじゃありませんか」

チンピラのような異形の来訪者が絡んできた。

次から次に忙しい。